

入選

大丈夫

和歌山県 智辯学園和歌山小学校

2年 齋藤悠太郎

ぼくは、毎日学校に電車で行きます。ある日、かえりの電車の中で、ないている男の子がいることに気がつきました。ぼくは、いつもと同じ電車にのっていたけれど、その男の子を見たのははじめてでした。その男の子は、ランドセルをせおっていて、ふくがぼくとちがったので、ぼくと同じ学校の子ではないと気づきました。

その男の子は、ぼくよりせがひくかったので、年下に見えました。よく見ると、その男の子が下を向いてないているのが見えました。ぼくは、ないている理ゆうが分からなかったので、声をかける方がいいのか、声をかけない方がいいのか、なやみました。

ぼくも前に、かぞくとりょこうしたとき、同じようにないたことがありました。それは、あるところでトイレに行って出てきたら、だれもいなくて、おいていかれたかなと思ったからです。ぼくはどンドン、こわくなりました。どンドン、さびしくなりました。

「お父さん、どこ。」「おかあさん、どこ。」

と、さげびました。でも、見つかりませんでした。「どうしよう」と思って、なきそうになりました。そのとき、知らないおばさんがいたので、思い切って「まいごなんです。助けてください。」と、声をかけました。

おばさんにぼくの名前と、車のナンバーを教えました。すると、おばさんは、「それは困ったね。」と、言ってくれて、いっしょにさがしてくれました。ぼくは、すこし安心しました。

すぐにお父さんの声が聞こえたので、走っていくと、お父さんと会うことができました。おばさんが助けてくれたので、「ありがとうございます。」と、おれいを言いました。だから、その男の子もぼくが近くにいることで、「ほっとするかな」と思いました。

ぼくは、近づいて行って、かたをトントンとして、

「大丈夫？なんでないているの。」

と、聞いてみました。男の子は、ちらっとぼくの方を見て、小さい声で「大丈夫。」と言ったのが聞こえました。でも、ぼくは男の子のそばにいてあげることにしました。「大丈夫かな。なんでないているのかな」と、思いました。

ぼくは先に電車をおりるとき、その男の子に「バイバイ。」と、言ってからおりました。家に帰ってお父さんに言うと、「いいことしたね。」と、ほめてくれました。うれしくなりました。

また、ないている子を見つけたら、声をかけてあげたいなと思いました。